2011 年 10 月 2 日　西福岡教会　礼拝説教　　中川憲次

説教題　　「愛に生きる」

聖書箇所　　ローマの信徒への手紙　９章１節　―　５節

「わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。」

宮沢賢治は１９２６年に農学校の教師を辞め、「羅須地人協会」を設立しています。その理念に次のように言います。

「俺たちは皆農民である。随分忙しく仕事は辛い。もっと明るく生き生きと生活する道を見つけたい。われらは世界のまことの幸福を尋ねよう。世界が全体幸福にならない限り、個人の幸福はあり得ない」

世界とは自分以外の人間が、自分も含めて形成しているものです。それは、隣人と共にあるものです。宮沢賢治は、その隣人が形成する「世界が全体幸福にならない限り、個人の幸福はあり得ない」と言うのです。

私たちの最初で最後の戦いは、己がエゴイズムとの戦いでしょう。それは己を捨てて隣人の幸福を思うことです。

では。幸福とは何でしょうか。食べられない人が食べられるようになることです。では、食べられれば幸福か。

パウロは、人間の一番深いところにある幸福、幸福の深部について語っているように思います。人がキリストに救われるように祈ること、これは幸福のもっとも深いところに隣人が到達することを祈ることでしょう。

パウロは「兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています」と言っています。もし、私たちがイエス・キリストを信じるが故に救われているのなら、イエス・キリストを信じていない私たちの周りに住んでいる人々は救われていません。その人々が救われない限り、宮沢賢治の言う「世界が全体幸福にならない限り、個人の幸福はあり得ない」という言葉は私たちに働きかけてきます。

そして、パウロの未だ救われていない周りの人々に対する愛の深さは凄まじいものがあります。それは、まことにコリントの信徒への手紙一の **13** 章 **13** 節で、「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」と言ってのけたパウロにふさわしい言葉です。パウロは、信仰よりも愛を重視しています。信仰者の救いとはキリストに結ばれ、神に守られていることではありませんか。「キリストから離

され、神から見捨てられた者となっ」てしまったら、元も子もないではありませんか。しかし、ここに凄まじい逆説があります。パウロの信仰とは、愛そのものになりきる信仰でした。愛のために信仰さえも捨てる、そのような逆説的信仰でした。

私たちがパウロのような気持ちになって、家族をはじめ、自分の周りの未だイエス・キリストに救われていない人々の救いを祈り願うことができるかどうかは、イエス・キリストの救いを私たち自身が本当に信じているかどうかにかかっています。本当に救われねばならないのなら、捨てては置けないはずです。どちらでもよければ、「家族伝道は難しい」などと暢気なことを言っていられます。

私に洗礼を授けてくださった牧師は、「牧師は一代」と言うのが口癖でした。ご子息は30歳を超えておられましたが、礼拝に出てこられませんでした。それは私がまだ二十代の頃でした。「何を言うとるんじゃ。自己弁護するな」と私は思っていましたが、私自身が牧師になった今、私の3人の子どもたちの全員が教会に行っているわけではありません。私は、だからといって「牧師は一代」などというつもりはありません。私がイエス・キリストに救われたように、子どもたちにもイエス・キリストの救いに与かってほしいのです。

子どもたちだけではありません。私が日常的に接している福岡女学院の教職員についても同じことです。福岡女学院の事務職員は毎朝、8時30分から10分間程度の礼拝を守っています。それは全員で讃美歌を歌い担当者が聖書を朗読し、祈ったり奨励をしたりするのです。その担当は、クリスチャンであるとないとにかかわらず順番に回ってきます。クリスチャンでない場合でも、ほとんどの人がどこかの書物に書かれてある祈りなどを抜き出してきて読んだりしています。しかし、どうしても祈りたくない人もいます。その場合は、宗教主事に祈りや奨励を依頼してきます。中には、宗教主事に依頼することもせず、かといってイエス・キリストの御名によって祈ることもせず、黙祷ですます人もいます。それは、キリスト教に対する明らかな抵抗です。彼は、自分の信念を守っているのです。これは、教員でも同じことで、一切チャペルに足を運ばない人もいます。これらの人々に対して、福岡女学院に勤めている以上キリスト教に協力してもらわねばならないと命令するのはたやすいことです。事実、歴代の理事長の中には新任職員オリエンテーションの席で、「福岡女学院に勤めた以上はキリスト教を積極的に学んでほしい。その気持ちのない人は、今この場で福岡女学院に勤めることをやめて帰っていただきたい」とまでおっしゃった方もおられます。その理事長の気持ちは痛いほどわかります。しかし、そのように命令して、力づくで信仰を強要する態度は、本日の聖書の箇所で示されたパウロの態度とはかけ離れております。

パウロは、信仰的に確信を持った人でした。だから、本日取り上げた箇所のすぐ前では次のように言っていました。まず、ローマの信徒への手紙8章35節です。

「誰が、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」

次にローマの信徒への手紙8章39節です。

「高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」

それなのに、いやそうであればこそ、自分の周りにいる愛する人々がその救いの喜びに与かっていないことを思うにつけても、パウロはどうしようもない「深い悲しみ」や「絶え間ない心の痛み」を感じたのでしょう。パウロもまた、宮沢賢治の「世界が全体幸福にならない限り、個人の幸福はあり得ない」という思いを強く持っていた人でした。だから

自分一人だけが救われていても、彼の心は痛んだのでしょう。

昔、教会に行こうとしない私の息子に向かって、教会学校のある先生が「親不孝者」と言ってくださったそうです。その方のお気持ちは、宗教主事である中川の息子が教会学校にも行かないでは、中川の立場がなくなるではないか、そのような立場にお父さんを追いやる息子は親不孝者だというのでしょう。私は息子に言っておきました。「お父さんの立場などはどうでもよい。お父さんを人生の絶望の淵から救い出してくださったイエス・キリストというお方とお前が本気で交わる時が来るように祈っている」と。

何が悲しいと言うて、救われていない人がこの世の中に存在するほど悲しいことはありません。それこそが、この場にいる私たちの課題です。では、その課題を果たすために、私たちたちはどうしたらよいのでしょうか。それは、隣人のために、隣人が必要とすることを為すことでしょう。自分のことを後にして、隣人のことを先にすることでしょう。

ここで、ある人のことを思い出しました。私はその人の記念碑に函館で出会いました。1999年に函館で学会があって、その折に見たのです。その人は約６０年前に函館を去ったカナダ人伝道師ウィリアム・レニーさんです。旧制函館中学校（現函館中部高）や函館商業学校（現函館商業高）などで英語教師として勤務したカナダ人伝道師ウィリアム・レニーさん（一八六六－一九五一年）は一九〇六年（明治三十九年）、函館に来まして、英語教師として教壇に立ちました。レニーさんは、宣教活動のほか、地域の貧しい人たちの救済にも積極的に かかわったといいます。しかし、太平洋戦争直前の1941年、スパイの嫌疑をかけられて帰国なさいました。旧制函館中時代のレニーさんの教え子である高野武久さん（今生きておられれば101歳）は「自ら の生活を省みず苦学生を援助をするなど、本当に尊敬できる人でした」と恩師を振り返っておられます。

このレニーさんに出会われた人は他にもいます。菊池吉弥という牧師です。菊池牧師は若い頃、函館教会の祈祷会に出席していたレニーさんに出会われました。菊池牧師が出会ったレニー宣教師は、先ほども申したごとく、当時「貧民窟」と言われた所に住み、伝道所を開いていたといいます。片言の日本語で、伝道は一向に成果があがらなかったそうです。見かねた人が「英語を教えられたら」と忠告しましたが、はじめのうちは「私は英語を教えるために日本に来たのではありません。キリスト教を伝道するために来たのです」と答え、伝道者の姿勢を崩さなかったといいます。そして、驚くべきことに、帰国するまで、一人の受洗者も与えられなかったそうです。しかし、時を経て強い感化を受けた菊池さんは、やがて伝道者の道に献身したのです。

レニーさんは、まさに「わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります」というパウロの心を心として、函館の人々を同胞のように愛して、自分のことを後回しにして、苦学生を助け、貧しい人々を助けたのです。そして、彼は、一人の受洗者も与えられなかったけれども、倦まず弛まず、ただただ愛の動機から函館の人々に接し続けられたのです。

私たちも、パウロのような、そしてレニーさんのような愛に生かされたいものです。ただただ、救われていない人々の救いだけを祈り、自分自身のものを一切求めず、回りの方々への愛に基づいて何事をも行いたいものです。神様がイエス・キリストによって私たちに示された愛の大きさを、心の底から感謝しているなら、自ずからそのような生き方へと私たちは押し出されるに違いありません。伝道と称して、救われていない人を問題視したり、あるいは哀れんだりして、救ってやろうなどと考えるとしたら、それは愛に基づいた伝道ではないでしょう。それでは、「信仰と希望と愛、そのうちでもっとも大いなるものは信仰である」などということになります。

最後に、もう一度パウロの言葉のすごさを強調したいと思います。パウロは自分が「キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています」と言っていました。彼は神の救いさえも、自分のものとすることを放棄しています。エゴイズムの中で、最後に残るエゴイズムは、信仰や愛に関わるエゴイズムです。これが、宗教の世界にも争いを生み出したりいたします。信仰や愛をしっかりと持っている人間ほど性質（たち）の悪いものはないのかもしれません。愛を持つと、愛もまた私たちの所有物となり、そこではなお私たちのエゴイズムが活躍する余地があります。私たちは、愛を持つのでなく、愛になりきりたいものです。それこそが、愛に生きるということであり、そのとき私たちは本当に自由になるでしょう。

祈り　神様、私たちを愛そのものへと変え続けてください。この祈り、 主イエス・キリストのみ名によってお捧げいたします。